The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	張愛玲と映画
Author(s)	河本, 美紀
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49207
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【３】

氏　　名	河　本　美　紀（かわもと みき）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２２２９５　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**張愛玲と映画**
論文審査委員	（主査） 教　授　青野　繁治 （副査） 教　授　西村　成雄　　教　授　林田　雅至　　教　授　田中　　仁 准教授　今泉　秀人

論　文　内　容　の　要　旨

張愛玲（1920-1995）は、1940 年代の日本占領下の上海において名を成した作家である。「金鎖記」（1943）、「傾城之恋」（1943）に代表される小説や散文は中国語圏で広く親しまれ、中国文学を代表する作家の一人とされている。張愛玲研究は 1970 年代に台湾で本格的に始まり、現在では国や地域を越えて盛んであるが、そのほとんどを占めるのは小説研究である。

一方、張愛玲が映画鑑賞を好んでいたことはよく知られている。そして、張愛玲は映画との関わりも深いのであった。抗日戦争終結後、自分の作家活動を可能にさせた場を失った張愛玲は、上海を離れ、香港、アメリカへと生きる場所を求めた。常に変わらなかったのは、文学と映画への関心だったという。

幼い頃から映画ファンだった張愛玲は、中国語による小説執筆を本格的に始める前に、英語で映画評論を書いていた。抗日戦争終結後は上海で映画脚本を執筆し、香港からアメリカに移る過程でも、いくつもの映画脚本を書いていたのである。しかし、それらの作品に対する評価は、従来、高くはなかった。

本論は、張愛玲と映画を対象に扱っている。張愛玲と映画に関する資料は極めて限られるため、本研究において新たに発見された資料というのはほとんど存在しない。いずれも、従前の研究対象としては取り上げられる機会の少なかった既存の資料ばかりで構成されている。

序章では、小説家の張愛玲やその作品に対するこれまでの先行研究をまとめ、映画を切り口とする本研究の必要性を示す。

第一章では、まず、張愛玲が青年期を過ごした 1930、40 年代の大都市上海の映画を対象に、当時の映画館の様子や上映の状況を概括する。それによって張愛玲がどのような環境でハリウッド映画、中国映画、日本映画を鑑賞していたのかが明らかとなる。そして、1943 年に張愛玲の映画評論が掲載された英語雑誌『The XXth Century』やその映画評論の欄について検証し、張愛玲の書いた映画評論の特徴を考察する。また、中国映画史上での意義や映画の表現に意識的な張愛玲の映画観を明らかにする。

通常、張愛玲の創作の頂点は日本占領下の 1943 年から 1945 年までと見なされている。第二章では、張愛玲の「その後」――1950 年前後に焦点を当て、当時の張愛玲を知る人の回想録や上海市档案館所蔵の档案をもとに、張愛玲の創作を可能にした媒体や上海文芸界の人的ネットワークについて論じる。とりわけ柯霊（1909-2000）、桑弧

（1916-2004）、夏衍（1900-1995）らとの関わりは重要である。また、上海の映画会社「文華影業公司」での映画脚本『不了情』（1947）、『太太万歳』（1947）の執筆や、新聞『亦報』での小説連載などに触れ、張愛玲が 1952 年に上海を去った理由についても考察する。

1952 年に上海から香港へ移った張愛玲は、アメリカ総領事館広報センターで翻訳の仕事を始めた。張愛玲はここで知り合った宋淇（1916-1996）を通じ、その後の約 10 年間、香港の映画会社「国際電影懋業有限公司」（「電懋」）と関わるのである。第三章以降は、張愛玲と「電懋」との関わりを中心に論じる。まずは、香港映画界における「電懋」の位置付けを明確にし、張愛玲が「電懋」に脚本編集審査委員会の一員として加わった経緯を検証する。

張愛玲は 1955 年に渡米し、晩年までアメリカで暮らした。そのため、張愛玲が書いた「電懋」の映画脚本はアメリカから香港へ送られていた。第四章では、張愛玲が「電懋」に書いた第一作となる『情場如戦場（The Battle of Love）』（1957）を取り上げる。この作品は、映像や二種類の映画脚本など、資料が比較的揃っているため、映画化までの過程を明らかにすることが可能である。また、ハリウッド映画の一ジャンルであるスクリューボール・コメディ（screwball comedy）という視点から『情場如戦場』を分析し、さらに、『情場如戦場』の元となったアメリカの舞台劇『テンダー・トラップ（The Tender Trap）』との比較を加える。

第五章では『情場如戦場』に続く、スクリューボール・コメディの変奏ともいえる『人財両得（A Tale of Two Wives）』（1957）、『桃花運（The Wayward Husband）』（1958）、『六月新娘（June Bride）』（1960）を取り上げる。しかし、これらの作品に関する資料はかなり限られている。そのため、香港電影資料館の所蔵する各作品の脚本や「電懋」の刊行物、視聴可能な映像をできる限り比較する。そうすることで、張愛玲のオリジナルの構想に近づくことができ、張愛玲の描いたヒロインらは映像よりもさらに生き生きとして機知に富んでいたことが明らかになる。また、いずれの作品も、女性スターの魅力を充分に引き出すことにも成功していた。これらの作品は、いずれも北京語で作られていたが、当時、香港で制作された北京語映画は東南アジアに広く配給されており、張愛玲によるコメディも各地で好評を得ていたのである。「電懋」の刊行物『国際電影』の張愛玲に関する報道からも、当時、張愛玲には一流のコメディ脚本家というイメージが確立されていたことが判明する。

渡米後の張愛玲は、フェルディナンド・ライヤー（Ferdinand Reyher、1891-1967）と結婚した。第六章では、アメリカのメリーランド大学に所蔵されている、ライヤーの日記と、張愛玲がライヤーに宛てた手紙に拠っている。これらから、アメリカでの張愛玲の創作状況が明らかになり、各映画脚本の大まかな執筆時期も特定することができる。張愛玲はアメリカで英語による小説を書き始めたが、その出版は思うようにはいかなかった。そのため、張愛玲は 1961 年から 1962 年にかけて、「電懋」の映画脚本『紅楼夢』執筆のため、五か月間香港に滞在したのである。当時、香港映画界は「電懋」と「邵氏兄弟（香港）有限公司」の間に制作競争が起きていたことが災いし、張愛玲の香港滞在は、成果を得られずに終わった。その間、張愛玲が香港からライヤーに宛てた手紙から、脚本家よりアメリカでの小説家の道を選んだ張愛玲の姿が見えてくる。失意の中アメリカに戻った張愛玲は、再び英語による小説を書き続けた。

第七章は、アメリカに戻った後に張愛玲が執筆したホーム・ドラマ、コメディ、メロドラマを取り上げる。第五章と同様、香港電影資料館の所蔵する脚本と映像を比較し、張愛玲の書いた映画脚本の再現を試みる。大ヒットした「電懋」の映画『南北和』（1961）のシリーズ第二作となる『南北一家親（The Greatest Wedding on Earth）』（1962）、上海の「文華影業公司」の『哀楽中年』（1949）を反映した『小児女（Father Takes a Bride）』（1963）、ハリウッド映画『Waterloo Bridge（哀愁）』（1940）を改編した『一曲難忘（Please Remember me）』（1964）、イギリスの舞台劇『Charley's Aunt（のんきな叔母さん）』を元にした『南北喜相逢（The Greatest Love Affair on Earth）』（1964）、エミリー・ブロンテの小説『Wuthering Heights（嵐が丘）』を改編した『魂帰離恨天』（未制作）を対象とする。いずれも「電懋」の要求に沿った作品といえ、その元となる作品が比較的明らかである。この時期、香港映画界をとりまく状況の変化に伴い、「電懋」の制作路線も変更されたことから、これらの作品は次第に主流から外されていったのだった。

「電懋」が 1964 年に改組されて以降、張愛玲は映画脚本を書かなくなった。また、北京語映画自体も、1970 年代に入ると、広大な東南アジア市場を失い、香港では広東語映画の勢いが強まったことによって、北京語映画は消滅した。英語による小説では成功しないままに終わった張愛玲は、次第に人前に姿を見せなくなった。その一方、1940 年代の小説や散文は、台湾で作品が出版され始めたのを機に、香港や台湾を中心に何度かのブームをも巻き起こしな

がら多くの読者を獲得していった。1980 年代以降は上海でも張愛玲の作品が再評価され、中国文学史において欠かすことのできない「古典」になりつつある。

終章ではこれらの張愛玲をめぐる状況を概括し、張愛玲の小説と映画脚本の接点について考察する。そして最後に、香港、中国の映画史が改めて確立されつつある現状に触れ、これらの映画史における、本論で扱った作品の位置付けの問題について論じる。

以上を論じるに当たっては、いくつもの領域を視野に入れることが必要となる。そのため、第五章以外の各章の前に「導入」を設けている。「導入」では、中国映画史、香港映画史、小説家としての張愛玲、「電懋」に関して、本章にも関わる必要最低限の背景説明を加えた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、1940 年代に上海の文壇で小説家として活躍し、戦後香港を経て、アメリカに渉り、その後中国語圏で絶大の人気を得て、1980 年代に再び中国大陸でも脚光をあびるようになった張愛玲を、従来の小説中心の分析ではなく、映画という別の視点から論じたものである。

全体は序章・終章を除けば全８章からなる。

第一章は、張愛玲がその生い立ちからすでに映画と深いかかわりをもっており、当時としては非常に多くの映画を見る機会に恵まれていたことを、伝記的資料をもとに跡付け、1943 年、英字誌『The XXth Century』で担当した「On the Screen」で行った映画から、その「蒼涼」と評される小説から来るものとはイメージの異なる、コメディへの関心を示す張愛玲の映画観が覗えることを指摘するとともに、「夢に浸ることで満足するだけの素朴な観客とは一線を画する批評眼を獲得して」いたとする。特に日本映画については、『阿波の踊り子』『歌う狸御殿』に「踊り」を通して日本映画が表現していた「祝祭性」を見ており、ミュージカルのスタイルにも独自の見解をもっていた、という指摘は興味深い。

第二章は、戦後とくに 1950 年前後における上海文芸界とその人的ネットワークにおける張愛玲の位置づけについて述べる。特に中国作家協会および映画協会関係者、たとえば夏衍、柯霊、桑弧、龔之方、唐大郎らのネットワークとのつながりから論じる。我々が一番よく張愛玲に接するテクストである『伝奇　贈呈本』を出版した山河図書公司は、桑弧、龔之方、唐大郎らが設立したものであるが、彼らはまた「文華影行公司」のスタッフでもあり、張愛玲が映画のシナリオを執筆するようになる条件が、このようなネットワークによって整えられたのであり、かくて「不了情」「太太万歳」といった張愛玲脚本の映画が製作されていく。張愛玲は中華人民共和国という新しい環境のなかで、このネットワークを通じて生きようとしていたが、「知識人がないがしろにされる文芸政策が権力的なイデオロギーになることを、作家として受け入れられ」ず、上海を去って香港に赴いたのだと述べる。

第三章は、香港における活動に関するものである。張愛玲は香港で、反共小説「秧歌」「赤地之恋」を発表するかたわら、すでに上海時代からの知り合いであった宋淇と再会し、その紹介で「国際電影懋業有限公司」（電懋）に加わり、映画製作にも関わった。しかしその本格的仕事が始まる前に、張愛玲は渡米し、アメリカで引き続きその仕事を続けることになる。

第四章は、張愛玲が「電懋」のために書いた脚本「情場如戦場」をとりあげ、この作品が当時ハリウッド映画の一ジャンルであったスクリューボール・コメディを中国語映画にもちこもうとしたものであることを、舞台劇「テンダー・トラップ」との比較を通じて明らかにしている。本章執筆に際して、香港電影資料館を訪れ、現在『張愛玲全集』に収録されている「情場如戦場」とは異なる「情戦」と題する、張愛玲の最初の構想に近いテクストを発見し、それらの異動を整理して、「テンダー・トラップ」と比較している点は極めてオリジナリティの高い論の展開と言える。

第五章でも、映像が残されていない『人財両得』も香港電影資料館に保存されていた「電影劇本」を張愛玲のテクストと比較することで、人物設定、早いテンポ、時間設定、喜劇的闘争、力関係の逆転、直接的に描かない修羅場、危うい三角関係などにスクリューボール・コメディ的要素を見ている。しかし『桃花運』は、スクリューボール・コメディ的要素もあるが、スピード感に欠け、コメディとして洗練されていないとし、『六月新娘』は、細部ではスク

リューボール・コメディ的要素の強い部分もあるが、全体としては、スクリューボール・コメディ的要素は少ないとする。すなわち作品を追うごとにスクリューボール・コメディ的要素が控えめになるのだが、そこには張愛玲以外の手が加わっているのではないか、という疑問が残る、とする。しかしながらこれらの作品によって、張愛玲がそれまでの小説家としての評価だけでなく、コメディ映画作家としての認知と評価を得たことが、当時の評論から読み取れるとして、『国際電影』の章麗による文章をあげる。

第六章では、アメリカのメリーランド大学図書館が所蔵する張愛玲の夫フェルディナンド・ライヤーの日記を参照し、『情場如戦場』から『六月新娘』をへて『南北喜相逢』にいたる映画作品の脚本執筆時期を特定していく。

第七章は、『南北一家親』以降の脚本を分析し、ホームドラマ、コメディ、メロドラマなどジャンルの多様化が見られるが、それが映画会社「電懋」の要請に従ったものであること、コメディに関しては「張愛玲はロマンティック・コメディを意図していたことが明らかになった」とし、「電懋」が改組されることがなかったならば、張愛玲は更に続々とコメディ作品を書き続けたかも知れない、と述べる。

第八章（終章）は、1965 年以降の張愛玲に言及し、ライヤーの死後、公の場に姿を現すことの少なくなった張愛玲の、小説における旧作の改編、映画における活動、インディアナ大学でのシンポジウムへの参加などに触れ、さらに彼女の小説とその映画化、香港映画における位置付け等を行い、論を終える。

張愛玲研究といえば、ほとんどがその小説作品を研究する論文を占めるなか、張愛玲と映画というこれまであまりスポットの当たらなかった、しかし張愛玲研究において重要な位置を占めると思われるテーマを取り上げ、アメリカ、香港に残される貴重な資料の探索と解読を通じて書かれた本論文は、新しい発見を多く含んだ力作である。なかでもライヤーの日記は手書きの英文であり、その解読は非常な労力を要するものであるが、これを参照でき、論文に反映できたことで、中国や日本における張愛玲研究に貴重な資料を提供することになる点で、高く評価できる。今後の張愛玲研究において、重要な位置を占めるものとなることは疑いない。

よって、審査委員は全員一致で、本論文が博士の学位にふさわしいものであると認めた。